名稱

〔八雲御抄三上天象〕霰　万十六、これをみぞれとも云へり、たまぎるは似玉也　たばしるは、とばしるといへり、故人說なり、

〔藻鹽草一天象〕霰　万に、あられをみぞれとよめりと云々、　霰たばしる　とばしると云儀也、但、とばしるとはよまず、　霰みだれて　霰くだくる　霰ふる　ふりくる共　霰のおと　たまきる　似玉也　まる雪　あられの事也と云々　玉霰　霰ふりゑく　ひふり　氷降也、あられ也、

〔和漢三才圖會三天象〕霰　あられ音線　雪粒　霰本字　阿良禮　霰美曾禮　雹阿良禮、和名抄之誤也、可改、　大戴禮曾子曰、陽之專氣爲霰、蓋盛陰之氣在雨水、則凝滯而爲雪、陽氣搏而脅之不相入、則消散而下、因水而爲霰、五雜組云、霰雪之未成花者、今俗謂之米粒雪、雨水初凍結成者也、

降霰

〔倭訓栞前編二〕あられ　新撰字鏡、和名鈔に雹をよめり、迸散の義をもて名くる也といへり、霰をもよめり、霓は和俗の造字也、万葉集には丸雪を義訓せり、今俗これをひやうといふは、氷雨の音なるべし、陸詞が說に雹氷雨也と見えたり、

〔古事記下允恭〕天皇崩之後、定木梨之輕太子所知日繼、未即位之間、姦其伊呂妹輕大郎女而歌曰、略中

佐佐婆爾、宇都夜阿良禮能、多志陀志爾、略下

〔萬葉集十冬相聞〕寄雪

霰落、板敢風吹、寒夜也旗野爾今夜、吾獨寢牟、

〔萬葉集二十〕六年天平勝寶○正月四日、氏族人等賀集于少納言大伴宿禰家持之宅宴飲歌、

霜上爾安良禮多婆之里、伊夜麻之爾安禮婆麻爲許牟、年緒奈我久、

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作

霰零、鹿島之崎乎、浪高、過而夜將行、戀敷物乎、

〔萬葉集二十〕阿良例布理、可志麻能可美乎、伊能利都、須米良美久佐爾、和例波伎爾之乎、